





大島仮屋跡(代官所跡)

慶長14(1609)年の薩摩藩の軍事攻撃の結果、奄美群島は薩摩藩の統治下となった。赤木名の仮屋は慶安2(1649)年から寛文2(1662)年と寛文12(1672)年から享和元(1801)年まで設置され、奄美大島統治の政治的拠点となった。

現在は石垣にその名残を見ることができ、珊瑚の石垣や屋敷林のゲッキツやヒツバ(イヌマキ)を刈り込んで整然とした生垣は、薩摩と奄美の融合をなす屋敷景観である。



赤木名城跡

奄美大島の北部で北に大きく開口した笠利湾の基部に位置し、標高100mの観音が丘に立地する山城が赤木名城である。

12世紀から居館機能を備え15世紀に琉球の影響を受け、17世紀に薩摩の影響を受け今に残る。かつて交易・交流の拠点とする重要な役割を担っていた奄美を代表する城跡である。



観音寺跡

慶長14(1609)年以降薩摩の侵攻で大島仮屋(代官所)が赤木名に置かれ、奄美初の都市機能が整備された。

赤木名観音堂は延宝3(1675)年に建立され、文政2(1819)年に名瀬の伊津部に移転するまでおよそ144年間、この地に士民強化の殿堂としてその偉容を誇っていた。観音堂開山時の住職の墓碑も建立されている。



舟たまり

赤木名のやや東南から流れる前田川の主流は南北の山からの支流が加わり、赤木名集落の南端を流れる。河口付近には塩焚小屋、中金久では西側へ渡る飛石が配され、中洲もある。前田橋上流には船溜まりがあり、代官屋敷に荷揚げする船着き場等として利用されていた。今は大島北高のカヌーが滑るように走る。



里学舎

里、中金久、外金久の3集落を合わせて赤木名と総称している。その中で里集落は東南寄りに位置し、薩摩の影響を受けた施設機能が置かれた。里の学舎敷地あたりには天満宮が配され、松の並木が島津藩政の名残をとどめるものがあつたとされているが、今はその屋敷跡に里学舎がある。



富国製糖

黒糖作りは元禄11(1698)年に砂糖増殖を扱う黍横目、田地を扱う田地横目、船舶の出入りを検査する津口横目、砂糖樽製造要の樽木増殖を掌る竹木横目が置かれて本格的に始まった。

現在の富国製糖(株)は昭和37(1962)年に操業が始まり、自家発電の蒸気タービンは今も現役に稼働している。



前島一族の墓

赤木名は前島墓地、観音寺墓地、スタゲダ墓地、トフル墓、ニャトジリ墓地、メンテ山麓墓地などが記録されている。琉球・薩摩に仕えた前島墓地は相続墓地で分家はほとんどニャトジリ墓地を使用している。ウガンノハナ麓にある前島一族の墓地は山川石の五輪塔や八角墓地などであり形式的には薩摩墓地である。

現在は草に覆われ行くことが困難である。



儀志直の座圀牢跡

島役人の儀志直は美男子で唄・三味線にすぐれていた遊び人だったと言うが、晩年は精神を患い尻田の座牢へ。文化13(1816)年に横目赤木名村の座牢にて焼死したと言う。その娘・バアカナは親殺しの罪で処刑された。唄が盛んになると当時の時代背景をあらわす唄が生まれるため、伝説上の人物かもしれない。



里(さと)※方言名:ハキナサト

赤木名集落は里、中金久、外金久を総称した名称です。「ハキナ」のいわれは定かではありませんが、焼畑を表す「キナ」が転じたものとも言われています。笠利町内でも規模の大きな集落で、長らく奄美大島北部の政治、経済の中心的な役割を果たしてきました。そのため数多くの史跡が残っています。



赤木名のミキ

奄美の各シマジマでは旧8月にシバサン行事の神祭が行われ、ミキは欠かせない。ノロ神達の祈りの神歌や村落の祭祀にも欠くことのできないミキはそのシマ独特の味がする。赤木名ミキもやわらかなとろみのある発酵食品で、数日経つと酸味が出てくる。シマでは夏場の貴重な健康食品でもある。



菅原神社

笠利町中央公民館東側の山の中腹に、菅原神社があり学問の神様とされている。由来は薩摩役人が寄進した山川石製灯笼2基があり、嘉永年間に白尾伝右衛門作成の赤木名略図には弁天、巖島神社と記されている。明治30(1897)年に里に移転し、昭和4(1929)年に現在地へ移転された。



西郷隆盛が背もたれした柱

西郷は奄美に2回島流しになったとされるが、安政6(1859)年の大島行は藩から命じられて来島している。そのためシマを自由に出歩くことも赤木名に来て島人との勉強会も可能だった。その時に使ったのが旧中金久学舎の建物で、西郷隆盛が背もたれをした柱は現中金久の学舎に残されている。



旧中金久学舎(跡地)

西郷は安政6(1859)年1月、島流しではなく藩の命令で大島へ赴任してきた。島の若者たちとも気さくに交流し、赤木名にも訪れている。懇談会場として江戸末のヒキモン構造の旧中金久学舎が使用されていたという。棟木には紫微鸞鷲(しびらんか)の文字を有する。



三井家(横目役所跡)

赤木名地区には伝統的な古民家が残し、三井宅もその一つである。三井家のある敷地は横目役所として使用されていた場所である。井戸はサンゴ石製で150年以上前から使用し、高倉は築100年以上が経つ。屋敷は昭和30年頃の建築でみじよら(三鳥屋)で焼かれた瓦を使用している。



赤木名小学校(与人役所跡)

赤木名小学校は明治11(1878)年に開校している。現校舎前には二宮金次郎・西郷隆盛の銅像が並んで立っている。また、正面玄関横には「赤木名の子らよ、大木になれ」の標語がある。

藩政時代は島役人の与人役所跡とされ、奄美で初めて都市機能を備えたまちづくりを行っていたのが赤木名集落である。



赤木名カトリック教会

赤木名は旧笠利町の行政の中心であり、明治時代にカトリックの宣教が開始された。当初は借家を使用していたが、昭和元(1926)年にフランシスコ会カナダ管区により木造教会堂、司祭館、幼稚園が建設され、笠利半島での宣教の拠点となった。戦後はカプチン会により教会堂等の修築が行われている。



慰霊碑と防空壕

戦争の悲惨さを物語る史跡は多く、赤木名でも児童と先生、民間人が犠牲になった防空壕がある。

広島原爆投下と同じ日の昭和20(1945)年8月6日午後1時、米機が笠利上空に来襲。住民が唯一の避難地と定めた待避壕に児童と若い女性の先生を先に避難させたが、直撃弾が一瞬にして老幼男女40名を爆死させ



中金久(なかがねく)※方言名：ナアガネク

赤木名集落は里、中金久、外金久を総称した名称です。「ハキナ」のいわれは定かではありませんが、焼畑を表す「キナ」が転じたものとも言われています。笠利町内でも規模の大きな集落で、長らく奄美大島北部



墓地(湊尻墓地)

赤木名地区にはかつて多くの墓地が点在し、薩摩藩統治下で風葬から土葬に移行し、現在の外金久墓地に集約。島役人が眠るこの墓地では、墓石が地位の象徴とされ、薩摩の石材で墓石は砂糖900斤に相当する価値があったと伝わる。また、大量の砂糖を納め初めて苗字を賜り島役人となった「南喜相明主」の墓もあり、彼の功績は八月踊りで今も語り継がれる。



サンゴの石垣

外金久にあるサンゴの石垣は里のサンゴ石垣にくらべ、一段と高く積まれている。古来は「サンゴ石垣は夏でも熱を持たない。台風ときは風や波を吸い込むため倒れない。ブロック塀は夏暑く、台風の時もともに波風を受けるため倒れ易い。昔の人は偉いと思う」と話す。生活の知恵がここにも生きている。



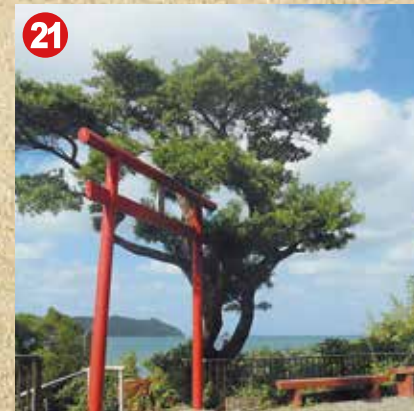
ハキナ立神(赤木名立神)

立神の地名は九州では「たてがみ」、奄美では「たちがみ」、沖縄では「たちがん」などと呼ばれ、奄美群島に多く見られる。その特徴は岬や突端から少し離れ、そそり立つ岩礁であること。「立神」は、信仰の重層性が色濃く残っているシマならではの地名と言える。



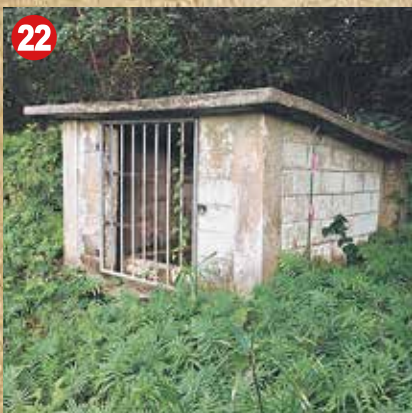
三鳥屋(ミジョラ)の瓦用粘土採取場

ミジョラは外金久から少し離れた北側にあり、山間に水田や畑に恵まれる。ミジョラの粘土は古生層からなり、灰褐色で粘性がある。目を凝らしてみると微小貝の化石が確認され、昔干潟であったことがわかる。この粘土はミジョラ瓦の原材料として昭和23(1948)年から4～5年間製造に用いられ重宝がられた。



厳島神社

厳島神社は外金久北側の塩間にあった中金久の弁天社が厳島神社へ改称し、明治30(1897)年ごろに現在地に移転。海岸の眺めが最高で航海、芸術、特に安産の神として近年では新婚さんのフォトスポットで人気。令和3(2021)年に集落住民で新築。北側に立地する赤木名城の城域に神社を建立しており、この山一帯は赤木名地区にとって特別な思いが感じられる山である。



スダゲダの泉

赤木名地区は井戸を所有する家が113軒もある。井戸水は、洗濯や風呂などの生活用水として利用された。飲料水としての利用できる井戸は3集落で5か所ほどあり、外金久はスダゲダのイジュンゴに代表される。今もコンコンと湧き出ており、学舎前ではタンクを作り利用している。草に覆われていけない時もあるが、集落で作業をして守られている。



笠利サンセットパーク

外金久集落はずれの三鳥屋にあるサンセットパークは笠利湾に沈む夕日がきれいな集落民が誇る一押し場所である。平成22(2010)年度にサンセットパークとして四阿や海岸に降りる階段が整備され、ハキナ立神を臨みながら縁起の良い風景と美しい夕日を同時に味わうことができる絶景のフォトスポットとして人気である。



外金久(そとがねく)※方言名：カネク

赤木名集落は里、中金久、外金久を総称した名称です。「ハキナ」のいわれは定かではありませんが、焼畑を表す「キナ」が転じたものとも言われています。笠利町内でも規模の大きな集落で、長らく奄美大島北部の政治、経済の中心的な役割を果たしてきました。そのため数多くの史跡が残っています。